

津

端

亨

編

纂

現代短歌分類辭典

新裝判
54卷

津
端
亨
編
纂

現代短歌分類辭典

新裝判
54卷

現代短歌分類辞典

新装版 54 卷

通巻 2 1 2

平成七年十月二十日発行

定価一七、四〇〇円

著者発行
兼印刷者

津 端 亨

発行所

現代短歌分類辞典刊行所

代表 津 端 亨

〒 345

埼玉県北葛飾群杉戸町宮前一九六―五

電話（〇四八〇）三八―〇〇四〇番

振替 東京三―九三二―四

(ISBN 4-87706-212-2)

目

次

目次

歌数	頁数	歌数	頁数	歌数	頁数
みかづき〔三日月(続き)〕	四五 一	みさかい〔見境〕	二 三二	みさき〔岬・崎・さき〕	一 四七
みがって〔身勝手〕	三 二	みさき〔岬・崎・さき〕	一六 三二	みさき〔三崎〕	四五八 四七
みかど〔帝・御門〕	一三〇 二	みくに〔御国〕	八九 三二	みさく〔見放く〕	三八 五八
みがら〔身柄〕	三 六	みくにとうげ〔三国峠〕	一五 三五	みささぎ〔陵〕	五五 六〇
みがら〔身軽〕	七 六	みくり〔三稜草〕	九 三五	みさだめる〔見定める〕	二〇〇 六一
みがらさ〔身軽さ〕	三 六	みぐるみ〔身ぐるみ〕	七 三六	みさびた〔水鏡田〕	一六 六七
みがろし	一 六	みけ〔三毛〕	四 三六	みさびも〔水鏡藻〕	三 六七
みかわす〔見交わす〕	一 六	みけつかん〔未決監〕	二 三六	みざる〔三猿〕	一 六七
みかん〔未完〕	六 六	みけつしゅう〔未決囚〕	一 三六	みじかい	二 六七
みかん〔蜜柑〕	二七九 六	みけつしるい〔未決書類〕	一 三六	みじかび〔短日〕	二 六七
みかんせい〔未完成〕	八 一四	みけん〔眉間〕	二五 三六	みじかよ〔短夜〕	一 六八
みかんばたけ〔蜜柑畑〕	一九 一四	みこ〔巫女〕	二六 三七	みしがん〔ミシガン〕	四九 六八
みかんばやし〔蜜柑林〕	二 一五	みこしじ〔三越路〕	三 三八	みじたく〔身仕度〕	三 六九
みかんやま〔蜜柑山〕	二八 一五	みこころ〔御心〕	一〇三 三八	みしまたいしゃ〔三島大社〕	一 六九
みき〔幹〕	二九 一六	みこし〔御輿・神輿〕	四五 四一		一 七〇
みき〔右〕	一〇四 二四	みこと〔見事〕	二〇 四二		八四 七〇
みき〔神酒〕	一四 二六	みことさ〔見事さ〕	二 四三		九 七二
みぎうで〔右腕〕	八 二七	みことのり〔詔・勅〕	六八 四三		九 七二
みぎがわ〔右側〕	二 二七	みごもる〔身籠もる〕	三〇 四五		一 七二
みきき〔見聞き〕	二 二七	みごろ〔見頃〕	五 四六		二 七三
みきさあ〔ミキサ―〕	五 二七	みごろし〔見殺し〕	二 四六		一 七三
みきだち〔幹立〕	一 二八	みこん〔未婚〕	三 四六		四二 七三
みぎて〔右手〕	五 二八	みさ〔ミサ〕	一三 四六		三 七四
みぎひだり〔右左〕	二六 二九	みさいる〔ミサイル〕	二 四七		一 七四
みぎり〔砌〕	五二 三〇	みさお〔操〕	二 四七		四 七四

みじろぐ〔身動ぐ〕	九	七五	みずかさ〔水嵩〕	一五	一三三	みずすまし〔水霜〕	一	一五三
みじわ〔水皺〕	六八	七五	みすかす〔見透かす〕	一	一三四	みずしも〔水霜〕	二五	一五四
みしん〔ミシン〕	三〇	七七	みずから〔自ら〕	一九	一三四	みすずかる	六	一五四
みじん〔微塵〕	八四	七八	みずがれ〔水涸れ〕	四二	一三九	みすそこ〔水底〕	一八	一五四
みす〔御簾〕	四	八〇	みずぎ〔水着〕	二二	一四一	みずた〔水田〕	二四	一五九
みず〔水〕	八七	八一	みずき〔水木〕	一六	一四一	みずたぎつ〔水槩〕	一	一六三
みずあおい〔水葵〕	一	一〇六	みずきゆき〔水漬ゆき〕	一	一四二	みずたま〔水玉〕	二一	一六三
みずあか〔水垢〕	五	一〇六	みずぎわ〔水際〕	一二	一四二	みずたまり〔水溜まり〕	三	一六三
みずあげ〔水揚げ〕	五	一〇六	みすぐ〔見過ぐ〕	一六	一四五	みずちゃや〔水茶屋〕	五	一六四
みずあさぎ〔水浅黄〕	一一	一〇七	みずぐき〔水茎〕	一〇	一四六	みずつかぬ〔水不着〕	一	一六四
みずあそび〔水遊び〕	三	一〇七	みずくさ〔水草〕	九七	一四六	みずつく〔水漬く〕	三六	一六四
みずあふひ〔水葵〕	二	一〇七	みすぐす〔見過ぐす〕	一	一四九	みずっぱい〔水っぽい〕	二	一六五
みずあび〔水浴び〕	一一	一〇七	みずくだもの〔水果物〕	二	一四九	みずでっぽう〔水鉄砲〕	二	一六五
みずあめ〔水飴〕	二	一〇七	みずくみ〔水汲み〕	三六	一四九	みすてりい〔ミステリ〕	一	一六五
みすい〔未遂〕	二	一〇八	みずくみぐるま〔水車〕	一	一五〇	みすてる〔見捨てる〕	一	一六五
みずいらす〔水入らず〕	一	一〇八	みずぐるま〔水車〕	一	一五〇	みずとり〔水鳥〕	一六	一六五
みずいり〔水入り〕	四	一〇八	みずけ〔水気〕	三四	一五〇	みずな〔水菜〕	一二	一六九
みずいろ〔水色〕	一一	一〇八	みずげい〔水芸〕	三	一五一	みずなぎどり〔水風鳥〕	一	一七〇
みずいろぎぬ	一	一一一	みずけむり〔水煙〕	一七	一五一	みずなみ〔水波〕	三	一七〇
みずうつ〔水打つ〕	一九	一一一	みずご〔水子〕	三	一五一	みずなら〔水槽〕	二	一七〇
みずうみ〔湖・うみ〕	六三	一一一	みずごけ〔水苔〕	一三	一五二	みずなら〔水槽〕	一	一七一
みずえ〔水絵〕	一	一一八	みずごり〔水垢離〕	五	一五二	みずのあか〔水の垢〕	一	一七一
みずえさす〔瑞枝〕	一	一一八	みずさを〔水棹〕	八	一五二	みずのあわ〔水の泡〕	五	一七一
みずおち〔鳩尾〕	一	一二八	みずさき〔水先〕	一	一五三	みずのみ〔水飲み・水呑み〕	二	一七一
みずおと〔水音〕	一八	一二八	みずさし〔水差し〕	一	一五三	みずば〔水場〕	三	一七二
みずかがみ〔水鏡〕	七	一三三	みずし〔御厨子〕	一〇	一五三	みずばしょう〔水芭蕉〕	二〇	一七二
みずかき〔水掻き〕	四	一三三	みずしごと〔水仕事〕	四	一五三	みずばしら〔水柱〕	四	一七二
みずかげん〔水加減〕	一	一三三	みずしぶき〔水飛沫〕	二	一五三	みずばな〔水漬〕	五	一七三

みずひかる〔水光る〕	一六 一七三	みせものごや〔見世物小屋〕	三一 一八七	みぞれのあめ〔霰の雨〕	二 二二九
みずひき〔水引〕	三七 一七三	みせや〔店屋〕	二 一八七	みだ〔弥陀〕	一七 二二九
みずひきぐさ〔水引草〕	三五 一七四	みせる〔見せる〕	二 一八七	みたいた	三 二二〇
みずびたし〔水浸し〕	二 一七五	みそ〔味噌〕	九二 一八八	みたけ〔身丈〕	六 二二〇
みずぶくれ〔水膨れ〕	一 一七五	みぞ〔溝〕	一六九 一九一	みたけ〔御嶽・御岳〕	六五 二二〇
みずぶろ〔水風呂〕	一 一七五	みぞう〔未曾有〕	二 一九五	みたけそうじ〔御嶽精進・御岳精進〕	二 二二三
みずべ〔水辺〕	三五 一七五	みぞおち〔鳩尾〕	一 一九五	みだし〔見出し〕	九 二二三
みずほ〔瑞穂〕	九 一七六	みそか〔密〕	一 一九五	みだしなみ〔身嗜み〕	一 二二三
みずぼうそう〔水疱瘡〕	二 一七七	みそか〔晦日〕	二 一九五	みたす〔満たす・充たす〕	三四 二二三
みずほのくに〔瑞穂の国〕	八 一七七	みぞかは〔溝川〕	二五 一九六	みだす〔乱す〕	五三 二二三
みずまき〔水撒き〕	四 一七七	みそかを〔密男〕	一 一九七	みたて〔御楯〕	三三 二二五
みずまくら〔水枕〕	一〇 一七七	みそぎ〔禊〕	二七 一九七	みだどう〔弥陀堂〕	三 二二六
みずまし〔水増し〕	三 一七七	みそこ〔水底〕	一 一九八	みだによらい〔弥陀如来〕	三 二二六
みすみす〔見す見す〕	三 一七七	みそざさい〔鶴鶴〕	六六 一九八	みだぶつ〔弥陀仏〕	二 二二六
みずみずと	一 一七八	みそじ〔三十路〕	五〇 二〇〇	みたま〔御霊〕	八五 二二六
みずむし〔水虫〕	八 一七八	みそしる〔味噌汁〕	一〇 二〇二	みたまや〔御霊屋〕	一五 二二八
みずもち〔水餅〕	三 一七八	みぞそば	一 二〇五	みため〔見た目〕	一 二二九
みずや〔水屋〕	二 一七八	みそづけ〔味噌漬け〕	一 二〇五	みだら〔猥ら・淫ら〕	二四 二二九
みづら〔角髪・角子〕	一 一七九	みそなはす	二 二〇五	みたらし〔御手洗〕	六二 二三〇
みする〔魅する〕	一 一七九	みそに〔味噌煮〕	三 二〇五	みだりに〔漫りに・妄りに・乱りに〕	一六 二三一
みずわかば〔瑞若葉〕	二 一七九	みその〔御園〕	七八 二〇五	みだる〔乱る〕	一八 二三二
みせ〔店〕	二 一七九	みそはぎ〔襖萩〕	九二 二〇八	みだれがみ〔乱れ髪〕	一〇 二三六
みせいねん〔未成年〕	一 一八五	みそのふ〔御園生〕	六一 二〇八	みだれとぶ〔乱れ飛ぶ〕	一〇 二三六
みせさき〔店先〕	四三 一八六	みそひともじ	三 二二〇	みだれる〔乱れる〕	七 二三六
みせすがかき〔店清掻〕	一 一八七	みそも〔御衣〕	一 二二〇	みち〔道・路・途〕	七 二三七
みせばん〔店番〕	四 一八七	みそら〔御空〕	七八 二二〇	みち〔未知〕	四一 二五九
みせびらかす〔見せびらかす〕	一 一八七	みぞる〔霰る〕	八 二二三	みちあんない〔道案内〕	二 二六〇
みせもの〔見世物〕	四 一八七	みぞれ〔霰〕	二〇九 二二三	みぢか〔身近〕	六七 二六一

みちくさ〔道草〕	二五二六二	みっか〔三日〕	一九五二九八	みつめる〔見詰める〕	八三〇
みちしお〔満ち潮〕	一三二六三	みっかぼうず〔三日坊主〕	二二〇三	みつもり〔見積もり〕	一三〇
みちしば〔道芝〕	三五二六四	みつかる〔見つかる〕	一三〇三	みつもる〔見積もる〕	一三〇
みちじゅん〔道順〕	二二六五	みつぎもの〔貢ぎ物〕	一三〇三	みつゆ〔密輸〕	一三〇
みちしるべ〔道標〕	一五二六五	みつぐ〔貢ぐ〕	三三〇三	みつゆにゅう〔密輸入〕	二二〇
みちすがら〔道すがら〕	四八二六五	みづく〔水漬く〕	四五三〇三	みつゆび〔三指〕	一三〇
みちすじ〔道筋〕	五二六六	みつける〔見付ける〕	一三〇五	みづらし〔見辛し〕	二二一
みちつづき〔道続き〕	一二六七	みつこ〔三つ子〕	一三〇五	みつりょう〔密猟〕	二二一
みちづれ〔道連れ〕	三二六七	みつこ〔密語〕	三三〇五	みつりょう〔密漁〕	四二一
みちなか〔道中〕	一〇二六七	みっこう〔密行〕	一三〇五	みつりん〔密林〕	五六三一一
みちのく〔陸奥〕	五三二六七	みっこう〔密航〕	一三〇五	みつりんせん〔密林戦〕	一三二
みちのくびと〔陸奥人〕	九二八二	みっこく〔密告〕	一三〇五	みつりんちたい〔密林地帯〕	三三二
みちのくやま〔陸奥山〕	一三二八二	みっしつ〔密室〕	二二〇五	みつろう〔蜜蠟〕	一三二
みちのそら〔道の空〕	三二八三	みっしゅう〔密集〕	八三〇五	みと〔水戸〕	一四三三
みちのべ〔道の辺〕	一五三二八三	みっしり	四三〇六	みどう〔御堂〕	一七五三三
みちのり〔道程〕	七二八七	みっせい〔密生〕	五三〇六	みどうすじ〔御堂筋〕	一三八
みちばた〔道端〕	八一二八七	みっせつ〔密接〕	一三〇六	みとおし〔見通し〕	三三八
みちひ〔満ち干〕	二二九〇	みっそう〔密葬〕	一三〇六	みとおす〔見通す〕	二三八
みちびく〔導く〕	七四二九〇	みつぞう〔密造〕	二二〇六	みとこうもん〔水戸黄門〕	一三九
みちぶしん〔道普請〕	二二九二	みっちゃく〔密着〕	三三〇六	みとなまり〔水戸訛〕	一三九
みちみち〔道道・道々〕	三二二九二	みってい〔密偵〕	五三〇七	みとめる〔認める〕	五五三一九
みちやく〔未着〕	二二九三	みつど〔密度〕	六三〇七	みどり〔緑〕	一一六二三〇
みちゆきぶり〔道行触〕	一二九三	みつどもえ〔三つ巴〕	三三〇七	みどりご〔嬰兒〕	七八三三三
みちる〔満ちる〕	四二九三	みつば〔三つ葉〕	一六三〇七	みどりたつ〔緑立つ〕	二二三五
みつ〔蜜〕	三八二九三	みつばち〔蜜蜂〕	四四三〇八	みとりめ〔看護婦〕	一三五五
みつ〔満つ〕	一二五二九四	みつぼうえき〔密貿易〕	二二〇九	みとれる〔見とれる〕	三三五五
みつあみ〔三つ編み〕	一二九七	みつまた〔三つ股・三つ叉〕	一三三〇九	みどろ	五〇三五五
みつうん〔密雲〕	一二九七	みつみねさん〔三峰山〕	二二一〇	みな〔皆〕	三五四三七

みなおす〔見直す〕	一〇 三六七	みにしむ〔身に泌む〕	七 四二一	みばえ〔見栄え・見映え〕	一 四五一
みなかみ〔水上〕	一九八 三六八	みにつまさる	一 四二一	みはなす〔見放す〕	一 四五一
みながら	三 三七三	みぬち〔身内〕	二 四二一	みはらし〔見晴らし〕	一〇 四五二
みなぎらふ〔漲る〕	一 三七三	みね〔峰・嶺・峯〕	一〇 三三 四二一	みはらす〔見晴らす〕	八 四五二
みなぎる〔漲る〕	九九 三七三	みねごし〔峰越〕	一 四三八	みはらやま〔三原山〕	七 四五二
みなげ〔身投げ〕	二 三七六	みねつづき〔峰続き〕	二 四三九	みはり〔見張り〕	二八 四五二
みなごろし〔皆殺し〕	三 三七六	みの	二 四三九	みはりだ〔水張田〕	一 四五二
みなさま〔皆様〕	二 三七六	みねやなぎ	一 四三九	みはるかす〔見晴るかす〕	三七 四五三
みなさん〔皆さん〕	一 三七六	みの〔養〕	三四 四三九	みひとつ〔身一つ〕	四六 四五四
みなしこ〔孤児〕	九 三七六	みの〔美濃〕	四三 四四〇	みひらく〔見開く〕	一三 四五五
みなせがわ〔水無瀬川〕	二 三七七	みのう〔未納〕	二 四四一	みぶ〔壬生〕	四 四五五
みなそこ〔水底〕	一〇 三七七	みのうえ〔身の上〕	二七 四四一	みぶでら〔壬生寺〕	六 四五六
みなづき〔水無月〕	一四二 三八〇	みのかぎり〔身限〕	三 四四二	みぶな〔壬生菜〕	二 四五六
みなと〔港・湊〕	三四二 三八三	みがす〔見逃す〕	三 四四二	みぶよもぎ	一 四五六
みなとがわ〔湊川〕	二 三九二	みのかわ〔身の皮〕	三 四四二	みふゆづく〔三冬付〕	二 四五六
みなとまち〔港町〕	一七 三九三	みのけだつ〔身の毛立つ〕	二 四四三	みぶり〔身振り〕	五 四五六
みなのか〔三七日〕	四 三九三	みのさかり〔身盛〕	一 四四三	みぶん〔身分〕	四 四五六
みなびと〔皆人〕	一三 三九三	みのたけ〔身の丈〕	三 四四三	みぼうじん〔未亡人〕	三二 四五七
みなみ〔南〕	二四 三九四	みのぶ〔身延〕	六 四四三	みほとけ〔御仏〕	一〇七 四五七
みなみおもて〔南面〕	三 四〇〇	みのぶさん〔身延山〕	四 四四三		
みなみかぜ〔南風〕	二四 四〇〇	みのふりかた〔身の振り方〕	一 四四三		
みなみじゅうじせい〔南十字星〕	七 四〇一	みのほど〔身の程〕	一 四四三		
みなみな〔皆皆〕	八 四〇一	みのまに	一 四四三		
みなみはんきゅう〔南半球〕	四 四〇一	みのまわり〔身の廻り・身の回り〕	五 四四四		
みなも〔水面〕	九六 四〇一	みのむし〔養虫〕	三六 四四四		
みなもと〔源〕	九三 四〇四	みのり〔実り・稔り〕	一〇二 四四五		
みなわ〔水泡・水沫〕	一四五 四〇七	みのりた〔稔り田・実り田〕	四〇 四四八		
みにくい〔醜い〕	三 四一一	みなる〔実る・稔る〕	六五 四四九		

計

一五九三一 首

みかづき【名詞】〔三日月（続き）〕

三日月の光きらめくしまらくを杉生の杜のくろきしづもり③

（現代短歌大系）

三日月の光一つを光にて武蔵野の原の日は暮れにけり（恩草）

三日月の光細ければ草原をい行く人等は炬火とす①

三日月の光木の間に入りやすしはかなき思ひ湧くとあらぬに④

三日月の光幽けき小夜にしてこの田舎家は降る蚊帳を吊る

三日月の光幽けき木がくりの庵にかへりて心やすらふ④

三日月の細き光も大空にあやになごみて春めく宵なり⑩

三日月の眉紅顔の才子型すらりと丈も美男若月⑩

三日月の昨夜は位置せし西方に見てしらじらと渡る南風あり今朝

は⑩（多磨四）

三日月のわづか明るき池の水白く見ゆるは吾が磨ける米①

三日月は黄楊の櫛より細かりき馬楽を訪ひし夜のおもひで⑩

三日月は沈みたれどもここにいて仰ぐこの木の花は白しも①

三日月は早くも落ちて薄闇のこの戦線に驟馬の嘶くあり

三日月を雲上に置き金環の片はしながら映すみづうみ②

三日月をけふ見そめけり望の夜の月はいづこの星に眺めむ①

三日月を今宵見しかば明日の日は船乗りすらく吾子のおもはる②

みづうみの氷は解けてなほ寒し三日月の影波にうつろふ

暑かりし一日の過ぎし夕空に細々かかる三日月の影

岬の空に光ましゆく三日月のしづけさに旅の心かよひて⑤

土田耕平

佐佐木信綱

築地藤子

島木赤彦

岡本かの子

島木赤彦

今井邦子

太田水穂

平松茂男

中村美穂

吉井勇

築地藤子

田仲重男

與謝野晶子

落合直文

中沢庭柯

島木赤彦

鐸木孝

安田章生

みそかごと持てばゆふべは三日月に掌を合せつつさびしかりけり

①（現代短歌大系）

道ばたにあかるともるわが家の外灯の上に三日月かかる

みづうみの氷は解けてなほ寒し三日月の影波にうつろふ④

武装のまま無蓋の貨車にいて仰ぐ黄鹿に霧らふ三日月淡し

郁子の花咲ける軒端の欄ひくし暮はてなくにてらす三日月（鹿若）

紫に夜の明け行けばしろがねの光ただよふ三日月の湖

もの云ひて薫る息吹を誰が知る思はざりしを三日月の影⑧

ものめける春のけはひの宵の口あすをたのまむ三日月の空①

玉蜀黍の穂立ちしづけき見透しにいま没り方を光る三日月⑤

屋根瓦夕さりくればややひえてかそかに光る細き三日月（あをぞら）

山の上にあをあを水のあることも三日月の夜は忘られてあれ③

山のべの若葉を浅み三日月の木の間がくりに光寒けさ

山の虫ガラスをたたき灯を恋ふる灯を消せば透明に青き三日月②

夕ぐれ空にはのめく三日月の見るほどもなく西に入るなり①

夕ぐれの三日月のうみ雲しづみ胸しづまりぬ妹に逢ひし夜は

夕さればあかるき空の三日月のそのいとしさは吾もありきや①

夕づけば三日月さやかにかりたる木立を越えて浅間山見ゆ①

夕焼の緒き雲間に三日月はうすくひかりてあらはれにけり

夕やけの雲は朧になりそめて三日月しろし葉ざくらの山①

夕さればあかるき空の三日月のそのいとしさは吾もありきや

宵にみし三日月のいろを身の痛みをさまりしままに憶ひすずしむ

①（多磨三）

水町京子

長谷川銀作

島木赤彦

辻昭

岡麓

尾上柴舟

尾山篤二郎

米倉久子

若林牧春

南正胤

前川佐美雄

島木赤彦

中野菊夫

明治天皇

伊藤左千夫

柳原白蓮

斎藤喜博

市山盛雄

丸岡桂

柳原白蓮

荒木暢夫

宵早く三日月落ちて朝顔の明日さく蒼白く見えぬ②

林道の真上に仰ぎ照り出づる三日月見つて来む車待つ②

わが庭の柳の梢冬となれり市空低き三日月のかけ

わが待ちし秋は来りぬ三日月の光しづけくかがやけりけり

別れゆく大杉むらに誰ぞとも夕三日月の眉にほひいづ①

みがって【名詞・形容動詞】〔身勝手〕

他人の迷惑はかまわず自分の都合だけで行動したり、考えたりすること。また、そのさま。自分勝手

こゑあげて笑ひし母のときどきに身勝手を言ふ母としおもふ③

百姓の苦情つくるは宜なれどまた身勝手なる言ひぐさのあり⑤

身勝手はそれぞれにあり親子すら一つ心にむきがたくして⑦

みかど【名詞】〔帝・御門〕

①天子・天皇・朝廷・皇居の尊称。②天子・天皇の治める国土。

あみかど教へたまひしことごとく水の泡より今ははかなし②

秋草のしげみがなかになく虫をきくにも明治のみかどしぬびたて

まつるかな①

秋の雲大き帝の御目にふれ巨き匠のながめけむ空に（黎明）

朝つ日の光に立ちて臺国の大きみかどをたふとみまつる⑤

あたらしき国のみかどとわが君とまことのかよふ時はきにけり

（新萬葉集別）

あなかしこ斯かる嶋にも遠く来て若き帝の歌ひたまひき⑩

音馬 実

遠野 左田子

稻森 宗太郎

古泉 千樫

森山 縫子

宮 柊二

中村 憲吉

岡 麓

杉本 寛一

三井 甲之

佐佐木 信綱

岡野 直七郎

入江 為守

與謝野 寛

あなかしこすめらみかどは神ながらわれらに御目賜ふなりけり⑥

天が下大き帝の二人しせ美酒のみしその肴なに①

天地にありとあるもの集むとも大き帝の前にちひさし⑧

天つ日のみかどの花の白菊とかなしみおもふこの秋にして②

あやしくも宮人さびぬ往くさ来さおほき御門を車ながらに①

あらうみは遠く昏れをりかなしかる帝をしぬびまゐらす間も②

ありとある山の名艦に附けてむとのぞみましたる大き帝はも①

（新萬葉集五・伏流）

あることかすめらみかどをおん父としたまふ日女のかくれますと

は

案内のをとめは声のさわやかに帝を伝へ静をかたる⑧

いかならむことの葉をもて称ふとも称へ足らざる御代よ帝よ⑧

生きてわれ六十歳の老も忘るべし昭和のみかどいくさを宣らす⑩

幾坪と数へあへぬべし畏しや三代の帝の大官どころ①（新萬葉集四）

いたはしと帝を思はば焼枯れぬともまた咲けよ佐渡の梅の木⑩

一系の帝かしこきこの国の扶桑の民に恙あらずな⑩

一国のみかど親しく訪はせらる大やまとは今さくら咲きさかり⑩

いづこにか蟬が声すと、あなかしこ、明治のみかど、御言をはり

ぬ⑦

古への歎しき帝の言ざねを護りて老いにし赤猪子思ほゆ③

いにしへの女みかどの浴みしみ湯われも浴みつつ痛き足をもむ①

（美穂）

尾上 柴舟

蕨 真

尾上 柴舟

三浦 義一

金子 元臣

三浦 義一

谷 鼎

茅野 雅子

岡野 直七郎

尾上 柴舟

川田 順

染谷 進

吉井 勇

吉井 勇

金子 薫園

釈 迢空

中沢 庭柯

金子 信三郎

豊島 晃

いにしへの幼なみかども偲 しの ばしし浦田の月は欠けにけるかも④	中村 憲吉
いにしへのすめらみかども中辺路を越えたまひたりのこる真清水	斎藤 茂吉
⑩	
いにしへのとほのみかどのいしずるをくさにかぞふるうつらうつらに	会津 八一
古の奈良のみかどの司らとみ狩り立たしし野べをわがゆく①	金子 信三郎
いにしへのひじりみかどもあはれあはれこのみ仏に近寄りたまひきや⑨	斎藤 茂吉
いにしへのみかどあらせし丘の下たわわになれる密柑色づく①	森 二郎
いませかし長五百秋をすめらぎはみかどの中の大帝にて⑫	與謝野 晶子
今の帝の榮ゆるときぞめぐり来ぬ清朝第二代太宗帝の陵や③	竹尾 忠吉
いまもなほ逢ふかとぞ思ふ真野あたり佐渡の帝の下臈雑仕に⑬	吉井 勇
美しくき難いつくこそ嬉しけれ若き帝の大御代にして(心の遺景)	與謝野 晶子
海山をへだてて歎き給ひけむ帝はここにしづまりています	松田 常憲
(秋風抄)	
衛士のたつ御門仰げばすめろぎの今もましますここにこそすれ②	井上 通泰
塩田の強き区切の末にありてちさき帝のちさきみやしろ⑬	尾上 柴舟
大さ帝かくしてや国見したまひし秋日照りわたる大和国原⑩	尾上 柴舟
大君の御門の衛士の、髯ぬきてあるに、現実しき我が身と、知れり	釈 迢空
大君のやぶしもわかぬ御めぐみに民も御門も春あふぐらむ	北小路 随光
大みかど歩みましけむ宛内の白砂のみちをかしこみてゆく	藤多 文一
(新万葉集七)	

大帝かくしてや国見したまひし秋日照りわたる大和国原	尾上 柴舟
(新万葉集九)	
大君の行幸かあらし旗立てて雪の御門を騎馬出づる見ゆ	北原 白秋
大帝の教化布設の大御代をこの君とともに扶翼せりけり⑩	太田 水穂
おのづから御硯潤むことあらむ帝を歎ぐかなしみのため⑫	吉井 勇
大さ帝 御代しつらへる 時にしも つかひまつれる 臣博文は②	下村 海南
大君のやぶしもわかぬ御めぐみに民も御門の春あふぐらむ	北小路 随光
(新年御歌会始)	
おほどかにましますものか皇の代々のみかどの宸翰を拜れば	橋 武男
(多磨四)	
大陵威みかどの兵とかへりみず園田義雄は戦ひ死ねり	井上 肇
(支那事変戦後)	
大帝かくれ給ひて五十年にかく吾は生き来つるかな⑦	岡野 直七郎
おほみかど必死に護りたりければ土中より出づるあはれ焦げ米①	池原 樽雄
檀原の大きみかどのみいくさを今の世の民継ぎて戦ふ⑨	川田 順
畏かる御門の前と思へるに牛追ふ人はかはりもなし(極)	木村 流二郎
かしこきやわが新みかど大み田にさなへとります尊貴のみ手もち	浅田 恵一
(新萬葉集二)	
かしこくも黒酒をわれに賜ひたる明治の大き帝おもへば⑬	吉井 勇
かしこくも父大帝そのままとおん後手ををがみつる秋⑧	尾上 柴舟
檀原の大きみかどのおほちちの神のみことがここにいましき⑧⑨	川田 順

かし原のみやのみかどの光よりやまどくに原夜はしらみゆく

(新年御歌会始)

橿原のみかどの世代地層にまで発掘至りて諸声きほふ③

閑古鳥鳴く声清しこの朝けすめらみかど御田植の記事を拝せり

(多磨四)

去年の今日は御帝かなしみ今日の今日君をかなしむも涙ひなくに

①

淨見原宮の帝の勅もちて立てし御堂に三つ立てる見つ⑩

国棄ててはしる帝よいにしへにたぐへておもふだにあはれなる

(新萬葉集四)

雲と共に竜を彫りたるこの階^{かひ}ををさなき帝ものぼりけらしも

げんこうのときのままなるくすのきとみかどのこれるくまどりの

むら⑦

元明の帝の御代を遠しのぶ久佐々の宮の神さび処①

こころなき旅人われも真野に来て佐渡の帝の御硯に泣く

(新萬葉集九)

ここをしも常宮としてかしこしや大さ帝のこもらしますか⑩

後醍醐のみかどの後座ををろがむも妻は初めて吾は三たびす⑥

この朝の飯にすわりて勿体なしはやも帝の鑑^{よね}いだします②

此の夜を作業する人遠くゆく大正帝の御陸のあたり①

楽浪の天津の宮は現かも三代のみかどの宮路荒れたり⑩

さばかりのめでたき帝いましける世もこの日よりいにしへとなる

⑫

千葉胤明

五島茂

平尾真一

蔵檀堂

窪田空穂

佐藤武郎

斎藤茂吉

安江不空

桐田蔭村

吉井勇

窪田空穂

岡野直七郎

臼井大翼

豊島晃

尾山篤二郎

與謝野晶子

寂しさに堪へず額伏せつつ思ふ佐渡の帝の葬り處かこれ②

詩の帝きみをまねくとよそはせし秋の御聲あうつくしき

(小詩四)

浸み透る草の露にも醒めであれ今もやすらに寝らむ帝は⑨

昭和十五年成りたる宮の山を負ふ近江の宮は天智のみかど⑩

皇祖の創らしし国をいやひろにいやかためましつ吾が大さ帝

(豊族雲)

すめろぎのみかどの御紋つかしけるこの天盃をたびたまひにし②

そのかみの帝の座湯まるらせし阿伽井の水のいやうつくしき

(多磨二)

退位して愛に殉^なへしイギリスの帝がことはものがなしけれ②

高御座のぼり給ひてかしこきや我等が帝おほみこと宣らす③

たぐひなき大さみかどの大御所にあひし事をぞおもひでにせむ

(新萬葉集別)

ただ一夜へだてしのみにあはれ彼のさきの帝となりまししか⑧

旅びとよ帝を思はばこの梅の青深苔に手をな触れそね②

たみもみないくさの勝をよろこびてみかどにつぐる万代の声①

父も母もあへぎうれたむつはものよみかどにそむく子となるなか

れ②

司人いまかかどにまうづらむ車のおとのたえずきこゆる①

築地ひくく廊めぐらし日のもとの代々のみかどのおはししところ

(昔)

吉井勇

金子薫園

尾上柴舟

松村英一

佐佐木信綱

三浦義一

藤岡良平

臼井大翼

植松寿樹

外山且正

尾上柴舟

吉井勇

昭憲皇太后

小杉放庵

税所敦子

村尾圭介

つづくらむ帝の夢をおほひつつひろがりたりや葛の大葉は

(間歩集)

帝を傷め鳥の孔雀よ世にひとつわれとも汝ともよそへにし君

(小麗)

天平の帝の御胸に描かしし仏と思ひ驚きあふぐ

天平の帝のみ眼にあがかせるその日思ひつ、大きき仏。④

東海の桜の国のうまし国わかき帝をことほぎまつる⑤

時の帝大き寂みしさに入りたまふ青山の秀に雲たな引けり①

名におへる帝にしてやとつぎせず少女子さびてかにかくせしも①

なにがしの帝が帰依の盧遮那仏今も昔の笑まひしませり③

寧楽の帝みことのりもて麦粟を食めよとそは論しまししか

はつ国の神武の帝このかたの大ききかどをここにをろがむ(互)

肇国を知ろしめしける日本の大ききかどのみことのりはや⑥

初日かげわがこの君を誰にやらむ北なる帝に恋は足らずよ(小麗)

春の遠き外光をのぞみつすめらみかどの大宮にわれは⑨

日に新た日に進めむと おほらかに 高宣しませり 昭和のみか

ど②

藤なみの花をし見れば奈良のみかど京のみかどの昔こひしも

二たびも大き帝にはなれ奉りいつまでわれの生きむとするか⑧

舞殿の幕は匂ふ夏がすみ後水尾の帝くだしたまへる⑦

まかがやく帝の皇子と生れまして大き正しき御代しらしつる⑥

愛で植ゑし帝のこころ残りゐて人を泣かしむ宜べやこの梅③

尾上 柴舟

與謝野 晶子

窪田 空穂

窪田 空穂

吉井 勇

三浦 義一

蕨 真

柳原 白蓮

窪田 空穂

小杉 放庵

花田 比露思

與謝野 晶子

吉植 庄亮

下村 海南

正岡 子規

尾上 柴舟

北原 白秋

佐佐木 信綱

吉井 勇

まゐり来て光に松の影黒し大き帝のみささぎどころ④

満洲の帝迎ふるすめらぎのひんがしの国花咲きにけり

帝が決意何人が審き得んといひたりしポウルドキン首相の言もか

なしき②

帝すでにあらぬに石をひしと抱く梅のころを愛しみにけり⑧

みかどすらこもにつつめとのらしけむたまとてります大御身にし

て⑩

みかど奉納の八つの経巻たかくかけ八角の堂いたく煤けぬ③

御陵を罷りつつおもふ天つ日の帝愛でましし多摩の山川

(新万葉集二)

御民われら守らであらめや大帝今日建てましし大和の国ぞ⑧

みづがきのみかどを入れれば神路山こころもきよくなりまさりけり

②

みのの国不破の山奥に古へのみかどもめでしみくすりの水⑧

明の代にさびしきみかど逝ぎにしを咳しつつ叢に入る⑤

桃山の大き帝のふみましし御あとふまして国ひらきまさむ⑥

(豊後雲)

やすみしし先の帝が国民に宣誓はししことも空しも

八隅知の大きみかどが神さりて葉山しげ山霜雲りせり

やぶれつる国のみかどの写真見き為事のひまにまた思ひ出づ

(新萬葉集四)

夜居の僧と帝とむかひいましつる如きおもひに二人黙しぬ(新月)

岡野 直七郎

村野 次郎

臼井 大翼

吉井 勇

安江 不空

松本 滋代

今中 楓溪

尾上 柴舟

明治 天皇

太田 水穂

釈 迢空

佐佐木 信綱

伊藤 左千夫

細井 魚袋

佐藤 武郎

佐佐木 信綱

聯想は畏れども冷泉の帝の狂氣親しくしおもふ⑤

わが生れし暗き時代の帝にて思ひみがたしその生きさまは④

われいまだ昭和の帝即位の日聴きたる玉のおん声に泣く⑬

をろがみいまは神としうり仰ぐ明治の大き帝おもひて(霹靂)

をろがみぬ帝かなしを思ひつつ陵守のみちびくまに②

吉野秀雄	田谷鋭	吉井勇	吉井勇	吉井勇
------	-----	-----	-----	-----

みがら【名詞】〔身柄〕

からだ。身体。

その身柄あづかりやらむまかせよと言ひくるる友のわれを泣かし

み①

裸木とけふよりなりし庭柱に身柄ちひさくゐる四十雀

黄葉ちりて身柄あらはれし四十雀この小禽今は去るべし

染谷進	宇都野研	宇都野研
-----	------	------

みがら【名詞・形容動詞】〔身軽〕

①からだの動きが軽快であること。また、そのさま。

あなさやけ振の袖をたち切りてをと女身軽く鍛とる見れば⑦

雨あとのもやたつ野路あたたかし外套をぬぎて身軽に歩く①

雨はれて気温のもどる昼さがり雀身軽く憐れたりくる(美善忌)

雨やめば身軽に蟻等巢を出でて屈托もなき仕事をつづく②

かつては手術室に運び入れし日もありき夫は身軽に空よりたちゆく⑤

く⑤

常のごと下駄穿き身軽に歩み来て身みづからをあはれがりなり③

ひるの斎食かたのごとくにいただきて下山の道の身軽きかなしさ

今井邦子	上杉一甫	相良義重	山辺白哉	長沢美津	長沢美津	長沢美津
------	------	------	------	------	------	------

みがらさ【名詞】〔身軽さ〕

常乙女ミスを通し来て身軽るさを今こそ知れといふは女博士⑤

妻が縫ひし衣のみがらさたらちねの前なりしかば言にださぬも①

前に飛び後に飛びて身軽さを人に示すといふ如き猿⑬

四賀光子	松田常憲	尾上柴舟
------	------	------

みがろし【形容詞】

身軽軽快であること。服装の簡易軽快なこと。

小鳥よりさらに身がろくうつくしくかなしく春の木の間ゆく君

若山牧水

みかわす【動詞サ五〔四〕】〔見交わす〕

①互いに相手を見る。みあわす。

命ありて再び会いし欲びに見交わす君の瞳すずしき③

浅野豊子

みかん【名詞】〔未完〕

まだ完成していないこと。

架けさして橋は未完のままにあり川霧のうへ朱のあたらしく④

感動の初発なまなましタッチ荒く原色塗りし未完の画面③

人生の半ばを生きてなお描く未完の心象はかり知られず②

地下道は長く未完のままにあり漠にとせる希望を伝ふ①

貧巷の屋根を圧してくろくろと未完のピルの高き鉄骨

未完ピルの鉄のにはひを話題とし昨日よりけぶる雨を見しをり

(毎日短壇)

田谷鋭	佐野四郎	渡辺信子	富小路禎子	生咲義郎	岩淵甲子郎
-----	------	------	-------	------	-------

みかん【名詞】〔蜜柑〕

芸香料の常緑灌木。高さ十尺餘に達する。夏、白色の五瓣花を開く。多の初黄赤色の漿果を結び、食用に供し、果皮を香料薬用とする。東南アジアの原産。また、蜜州とも云ふ。

青蜜柑かたく繁りてわが庭に秋の日数のすぎゆかむとす

土田耕平

あかねさす蜜柑畑の入つ陽をまばしみにつつ伊豆の山ふかし④

岡本かの子

秋浅く美しくまじきわが母の青き蜜柑をたまひつるとき①

黒沢武子

秋の日の澄める八十村蜜柑てり武射田の沼に鴨なくきこゆ①

藤 檀堂

秋早くもぎし蜜柑の青き皮むけば酸っぱき香りを放つ②

浅野豊子

朝ごとにさやく白き花匂ふ蜜柑見めぐり黒毛蟲つぶず①

菊山当年男

朝寒の畑の小みちの高声は蜜柑の安値かたりつつゆく

高島友次郎

汗ぬぐひわが見し庭の蜜柑の実そのままなれど今朝は涼しく①

三苦京子

暖う春めく日さす石壇をのぼりかねてはまた蜜柑吸ふ⑤

尾上柴舟

あたたかし金の箔まだ半おく蜜柑の濡るる吉浜の雨⑦

與謝野晶子

あひともに多く語らずテーブルの青き蜜柑を見つつをりたり⑥

鹿兒島壽藏

逢ひにゆく夜ふけの袖に見出でたる一つの蜜柑に寒さおぼゆる②

近藤元

あまき蜜柑は衰へし木に成るといふさびしきを吾は聞くなり

小暮政次

(村野四郎)

雨やみし庭に蜜柑の黄に垂りぬ吾には思ひ出もなにもなきしばし

村田利明

①

有田川瀬の光りつつたづきて蜜柑の山の黒きしづもり(毎日歌壇)

前田炸二

有田の川かみ山の淋しきは蜜柑のすでに腕がれたるらし④

中村憲吉

青々としげる蜜柑の山ふかしどこに人居るかこゑもきこえぬ①

荒木暢夫

青蛙のとぶくらせて鳴き出でぬ蜜柑の花の白きたそがれ

金山曠

(新萬葉集二)

青き葉はいくばく乾び肥後蜜柑姫みかんとよぶべくあはれ④

田谷 鋭

青き蜜柑に爪立てて香をかぐのみに満ちたらひたる幼な心か①

黒沢武子

青潮の上にまた青き蜜柑山かがやき据る大崎下島①

金子信三郎

青みおびて香にたつ蜜柑手にむきつ言ふべからざること堪へてをり②

村田利明

青蜜柑かたく繁りてわが庭に秋の日数のすぎゆかむとす②

土田耕平

(現代短歌大系)

青蜜柑鈴生る山に入りくれば吹く朝風も酸ゆきこちす

菊池知勇

青蜜柑たわわになりて尚堅く締りて清き処女の如し①

立花 馨

青蜜柑の汁をしぼりて唇に点滴し「蜜柑ですよ」と言ひつつ泣きぬ②

石川 まき子

青蜜柑はみつさむき冬柑の野みちを行きて茶の花を見たり

前田 夕暮

暗緑の蜜柑のもとに寄りゆけば花粉素肌につきし少女をり①

市川 敦子

怡々として君が司会の小半日ぬくもるものは蜜柑のみかは⑤

四賀 光子

家うらの水田のきはの捨芥蜜柑の皮の多き冬来も①

山下 陸奥

庵のぬし独り染むことをせず山の蜜柑を採れと云ふかな⑬

與謝野 寛

幾年の長き病のなぐさめに蜜柑もらひて年くれんとす①

正岡 子規

磯山の金の蜜柑の鈴鳴らず鳴りわたる時海の日の出でん②

與謝野 晶子

磯山の蜜柑の園の軒にあり海の明りと更けし夜の星⑬

與謝野 寛

頂ゆ蜜柑運ぶと雲透きに猿奔の線懸りたるかも①

中井 コツフ

板橋をわたりてくればほのぼのと蜜柑の花の匂ひがしたり

音馬 実

(あそび)

痛みくる足のいたはりて下りゆけば蜜柑の花をなつかしみ言ふ③ 大岡 博
 一とせはかへらむとして国原に蜜柑の花の千千に匂へり① 池原 楢雄
 何処へか光る雛をば放つべきかくぞ思へる蜜柑の木かな⑦ 與謝野 晶子
 伊豆の山つばきの花と蜜柑とが光りて照す初春の土⑩ 與謝野 寛
 岩山に先づ道を拓き金を投じ舗装なしたり蜜柑つくれと⑧ 宮 柊二
 今しがた蜜柑しゃぶりにありし子のいつか寢息を立てるたりけり 奥貫 信盈
 ① 荒木 暢夫
 うしろ山蜜柑収穫の季に入り索道におろす籠に蜜柑を① 池原 楢雄
 打水の凍るあしたを店先に斜塔のごとく蜜柑積みたり① 前田 夕暮
 打ちもだし酸ゆき蜜柑を吸ひにけりただわけもなく悲しかりしが 與謝野 寛
 ④ 馬に乗る農人ひとり逢ふほかは蜜柑の畑と冬枯の山⑩ 斎藤 茂吉
 海のかぜ山越えて吹く国内には蜜柑の花は既に咲くとぞ⑩ 橋田 東声
 裏畑の蜜柑おほかたもぎつくされふるさとの山は冬に入るならむ (地獄以後)
 裏山にもぎし蜜柑と取り出して妹はやさしき手にむきにけり 奥貫 信盈
 (朝露) 駅路添ひの丘の畑に朝の日のうるる蜜柑に光るわびしさ 石川 まき子
 丘畑の青蜜柑吹きゆるる風はるばると白し空に音して① 金子 信三郎
 燠の上にのせて待つ間の焼蜜柑焦ぐるにほひも冬さびにけり 今井 規清
 (新万葉集二) 夫のぬひひとりの食事直ぐに終り野菜のかはりに蜜柑食べおく② 武井 ひろ子

おとなしく頭剃らせてある甥の目の前にある褒美の蜜柑① 大熊 長次郎
 追ひ及かむ考へもなき少年に近づきて二つ蜜柑あたへつ⑥ 高田 浪吉
 大いなる秘密のごとくセーターの胸の蜜柑を子はささやきぬ 上山 幸子
 大きな蜜柑ばかりをよりどりて銭出すわれを人の見詰むる 立花 馨
 (村野四郎) 思ひしにたがひたりけり今日を来し吾子は蜜柑を食べざりけり① 三ヶ島 霞子
 隠し持つ蜜柑に敏く小猿ども齒をむき出して人脅かす 植松 寿樹
 籠一ぱい黄金色の蜜柑下ろされ来りリヤカーに積むあふるるばかりを① 荒木 暢夫
 籠のうへに柿と蜜柑との盛られたるその静物のところを味ふ② 土岐 善磨
 かすかにも領きたまふ青蜜柑の薫りて吾の哀しき満足感② 石川 まき子
 忝き心になりて年ほぎの蜜柑一つを分けてつ語れり⑦ 今井 邦子
 かたはらに棄てられしところげある青き蜜柑と君と悲しき③ 吉井 勇
 かちかちにつぼむ様の樹下みちしなび蜜柑を曳いて通るも④ 岡本 かの子
 かなしみで見しならねども山あひに厚き薬着る蜜柑の木むら⑥ 高安 国世
 果皮むくと鋭爪あつれば琥珀なす蜜柑の液が顔にとびつも① 岡本 大無
 髪なびけ腕あらはに枕して寝し傍にまろべる蜜柑⑨ 與謝野 寛
 鴨の時蜜柑の時は成東に家居る君を思はゆるかも① 蔵 檀堂
 枯芝に黄なる夕かげに蜜柑むき酒の後また酒が飲みたく 狩野 登美次
 皮のまま蜜柑くらへば驚きの視線あつまる中にわがくふ② 相良 義重
 皮むかせ蜜柑ひとつを食ひをはる列車に妻と坐る夕ぐれ① 上代 皓三
 皮むきて食べる蜜柑の一房も愛しみざまなる老の為ぐさを② 臼井 大翼

紀伊の海は流れて青しこの丘に蜜柑もぎ取れば枝ゆるる香よ①
 紀の国のうまし香つつみふくよかに蜜柑ならびぬ夜の市の家
 君の蜜柑の山の朝明け目をあけて蜜柑のみなり限りなかりき
 屑蜜柑すてられてある築岸に灰色の空ひくく見えをり①
 口の中に蜜柑をふふむ幼子が眼を細め窓の雲を見てゐる③
 唇に吸ふ蜜柑の肉のあえかなる甘さにしみて思ひおぼるる

(新萬葉集八)

国を挙げて今戦へば蜜柑植うるそのなりはひもつねならなくに
 食ひたくてありし蜜柑か幼な児の手には蜜柑を持ちて眠れり①
 曇り空暮れてしまひぬすべなくて蜜柑の青き庭は膽りつつ

(多磨二)

曇り日の山いちめんの蜜柑の実暗き葉がひに黄を沈むる②
 くらぐらと意識の断れしときのまあり握らされたる蜜柑はぬくく

⑤

喰ひあきし蜜柑の皮をなつかしみ枯木のもとを去らんともせず①
 俤走り黄色の蜜柑後になり温泉の町さかる胸つぼらしき①

くれなるの夕焼の中街角の店に並べり蜜柑と林檎③

黒揚羽漂ふごとく蜜柑越えカンナにとまり羽を休めず

黒木御所へ行く道に風がこぼしたる青き蜜柑はをとつひのまま③

けふ遺骨かへる日雨はれて蜜柑いよいよ青し(支那事変後)

黄金の蜜柑じゅうなる家々の海に向ひて豊なる伊豆①

木枯の吹き荒ぶ夜は虚しくて蜜柑の皮を火に燻べてゐつ(多磨二)

竹添履信	小島石榴	小暮政次	藤森朋夫	高安国世	森山謙一郎	柴生田稔	梅沢伊之助	中島千恵	川島園子	生方たつゑ	近藤元	木下利玄	都筑省吾	上山幸子	相良義重	荒木栄	中河幹子	浦上公助
------	------	------	------	------	-------	------	-------	------	------	-------	-----	------	------	------	------	-----	------	------

腰下し青年一人リユクサックより蜜柑四五十取り出す③
 腰おろして蜜柑はみて居り御神火のもえさかる音は足に覚ゆる④
 事みなは道にすてたる食ひさしの蜜柑の皮とばかりあぢきなく①
 この丘に蜜柑むきつつおもひ出づる峰人が顔健三が顔③
 この宿に春をまちつつしづこもり蜜柑むくべしあけくれに幾つ

(地盤)

ごみ箱をあふれて蜜柑の皮多し正月すぎの小路に入りて②

祭壇に盛りたる蜜柑 日を経たる 色やや褪せて皺みたるかな②

小枝ごと鋏に剪りし蜜柑かと肥後の山畑わが思ひみる④

堺村の道秋晴れて歩みつつ蜜柑むく手に蜂のきらめく④(角川文庫)

崎す山の巖と思ふところまで蜜柑にほひてみどりの島①

索道にさやさや摘みし蜜柑籠光りつつ下り来青き山腹①

酒に酔ひひとり帰りて父母に供へてありし蜜柑をぞ剣く⑨

さ夜深み酒さめ来つつ頭いたし腐りきつたる蜜柑好み食む

潮風にふき育てられ蜜柑の味去年より今年いやまさとふ①

下の海の朝焼けに紅く染まりたる大蜜柑をいままきらむとす

しつとりとしめつた上にこぼれてる蜜柑の花の白い朝です③

島に来て八月の蜜柑食うぶればげに亜熱帯の心おぼゆる

(新萬葉集七)

島人が黒皮西瓜と青蜜柑呷に入れて売りに来しかな(新萬葉集七)

清水港に蜜柑積みこむ汽船の上にみ富士晴れたる時雨来にけり

(現代短歌全集)

吉田正俊	松田常憲	矢代東村	金子信三郎	橋田東声	平福百穂	西村陽吉	田谷鋭	吉野秀雄	藤森朋夫	荒木暢夫	岡野直七郎	古泉千樞	荒木暢夫	鈴木貫介	矢代東村	松永直幹	松永直幹	中河幹子
------	------	------	-------	------	------	------	-----	------	------	------	-------	------	------	------	------	------	------	------